



第 154 号

—令和 7 年 9 月 20 日発行—

公益財団法人 古代学協会だより

藤原実資 小野宮第址 顕彰碑

大河ドラマ『光る君へ』でのロバート秋山氏の好演により、多くの方に知られることとなった「藤原実資^{さねすけ}」。実資は資産家で、広大な「小野宮第」に居て右大臣を務めていたため、「小野宮右府」とも称



された。このたび、株式会社都市ガバナンス研究所が製作監修し、「小野宮第」の跡地に顕彰する石碑と案内板を設置した。場所は夷川通の烏丸通西入ルで、方一町(約1.4ha)の規模に及んだ「小野宮第」の南端に当たる(ホテル「&naki」京都丸太町」門前)。

実資は日記『小右記』の著者として知られ、同時代の絶対権力者たる「御堂関白」藤原道長とは協調しつつも、筋を通す言動を貫いたことで「賢人」と讃えられた。また、『小右記』からは、実資が「小野宮第」に絶えず造作の手を入れていた様子がうかがえ、寝殿を中心に北、東、西に对屋、それに南庭と池、念誦堂を配置した邸第は、『枕草子』にも記されたほど堂々たるものであった。

近年の旧京都商工会議所移転に伴う発掘調査結果を踏まえ、池が南庭の南から敷地北東にまで深く入り込んでいたことを含め、推定再現パースを作成。現地案内板のほか、以上の「小野宮第」に関する詳細な解説や再現パースなどを「小野宮デジタルギャラリー」として公開している(<http://toshi-governance.co.jp/pi3.html>)。現地にもぜひご覧いただければ幸いです。

竹井隆人

(株)都市ガバナンス研究所代表

かなりアブナイBIZEN中南米美術館

BIZEN中南米美術館長 森下 矢須之

昭和四十年代半ば、小学校からの帰りに立ち寄った祖父森下精一の商家の店先に、巨大な木箱がいくつも重ねられていました。そして応接間には見知らぬ顔の客が数人。それは当時東大教授だった泉靖一先生と、その弟子で同じく東大助教授の増田義郎先生でした。木箱の中にはアルファベットの記事が覗く丸まった数多くの古新聞と、布にくるまれた古びた土器が入っていました。それが、私と私どもの收藏品との最初の出会いでした。その後数年は、増田先生が時折院生を伴ってお越しになり、祖父の家の土蔵に納められた土器や土偶、織物等を整理・分類してくださいました。そして1975年、祖父が自らのコレクションを広く一般に公開しようと財団を設立し開館したのが、森下美術館Ⅱ現BIZEN中南米美術館です。

圧倒的な質と量の古代中南米美術品コレクターだった祖父は企業経営者でしたが、商用で訪れたペルーで天野芳太郎氏（日系一世の企業経営者でアンデス文明研究家、旧天野博物館Ⅱ現天野プレコロンビアン織物博物館創館者）と出会い、氏が発掘・収集した古代アンデス美術品に接し、それらに魅了されたことが収集のきっかけとなりました。私は、そんな祖父のコレクションに接しながら育ち、ユニークでチャームिंगな古代美術品の宝庫とも言える古代中南米文明に心惹かれたのです。しかし祖父や父が携わっていた家業を継承するという暗黙のルールが敷かれていたため、いつかルールを複線にして「古代中南米文明研究をライフワークにする」と心に決めました。



クイ（天竺ネズミ）象形笛吹きボトル
ペルー極北海岸出土、ピクス文化
形成期中～後期/1200BCE～100CE

です。しかし祖父や父が携わっていた家業を継承するという暗黙のルールが敷かれていたため、いつかルールを複線にして「古代中南米文明研究をライフワークにする」と心に決めました。

考古学者との知己を得たことが、私の大きな財産となりました。帰国後は家業に携わり、五十代前半でBIZEN中南米美術館の専任理事長兼館長となり、現在に至っています。

日本唯一の古代中南米専門美術館である弊館の特長は、北はメキシコから南はボリビアまでの十一カ国で出土した、紀元前四千年頃～十六世紀に作られた古代作品を約二千七百点収蔵していること。即ち中南米全域、全時代の作品をほぼ網羅して収蔵しているということです。当初はアンデス地方の作品が中心でしたが、増田先生の的確なコレクションアドバイスもあり、祖父は徐々にメソアメリカや中間領域の作品も充実させたようです。さらに現地での収集や現地からの国外持ち出しがほぼ一斉に禁止になった1985年以降も、それ以前に中南米各国で作品を収集し日本に持ち帰っていた外交官や企業駐在員、芸術家の方々から多数の作品が寄贈されています。

美術館や博物館巡りが好きで国内外で数多くの館を訪れていた私ですが、弊館の館長に就任した直後に改めて館の展示や運営の現状をチェックしました。すると、長年携わったビジネスの視点で見ると疑問に思う点が少なくありませんでした。それまでは増田先生が長年監修してくださり、学術的な視点では最新かつ詳細な情報が常に展示に反映されていました。さすがは増田先生と感心し誇らしく思う反面、この内容を一般来館者が理解出来ているのだろうかとも感じました。そこで早速入館者アンケートを実施したところ、「高尚か

「つ難解で敷居が高い」、「暗く重苦しい」、「何度来ても同じ展示で新鮮味がない」等々、散々な評価でした。実はこれらは、美術ファンとしての私が感じていたイメージとも重なるものでした。当時展示ケースに並んでいたのは、所狭しと並んだ作品と文字がぎっしり詰まったキャプション。壁には白黒の大型遺跡写真と歴史解説パネル。そしてその専門的な解説には、誤解を恐れずに言えば「最新の研究成果を詳しく紹介するので、興味があれば学んでお帰りなさい」的な雰囲気漂っていました。つまり圧倒的多数の一般来館者ではなく、専門家やマニアックなアマチュア歴史ファンのための美術館になっていたのです。また作品の入れ替えも極めて限定的でした。

そこで私は、弊館の新ミッションを設定しました。それは『来館者の満足度を最高にすることにより、ニケーションの形を設計し実現することにより、古代中南米文化の魅力を不特定多数の方々に知っていたただく』という、ビジネスでは不可欠なマーケティング手法の導入でした。即ち来館者が、展示・運営、グッズ、サービス、情報提供などを通して弊館と接するあらゆる場面で、「ああ心地良い」と感じていただける形を企画・実現しようと考えたのです。と同時に、多数の美術館や博物館が今も当然のように行っているナンセンスな『美術館あるある』にも併せて手をつけました。一例を挙げれば、展示場内でのおしゃべり禁止。監視員は各展示室に配置されているのに、聞き耳を立て「お静かに!」と観覧者を叱りつけるのが仕事

で、展示品に関する質問には答えてくれません。一方マーケティング手法を導入した弊館では、以下のような数々の新機軸を打ち出しました。

【展示に関して】

●美大の演劇空間演出の先生にご協力いただき
小難しく、暗く、お高く、固い雰囲気を一掃。明
るく、楽しく、分かりやすく、エンターテイメン
ト性の高い展示を心掛けています。

● 壮大な歴史ドラマをご覧ください。舞台が弊館で、主役は当時生きた人々、作品は大道具や小道具と位置付けています。

●人や動物の作品を元に作ったキャラクターが語り部として当時を回想しながら作品解説するという、主観的語り口の解説パネルやキャプションをう、設置しています（→虫眼鏡をご覧ください）。



ご案内役は

[illegible]

【運営に関して】

●入館者全員を館長である私が入口でお出迎え。
退館時には出口でお見送りします。

●館長の私自ら質問にもお答えする、無料館内ガ

イドを実施しています。

●ガイドの冒頭では来館者がお住まいの都道府県や弊館を知った経緯を伺い、打ち解けた雰囲気を出し、同時に来館者調査も行っています。

●館内は写真、動画共に撮影OKで、記念撮影のためのシャッター押しサービスもしています。

●館内での会話もOKです（感動したら遠慮なく声を発してください」という案内板も設置）。

●スマホの充電スペースも設定しています。

●私自身ミュージアムコンセルジュを自称し、手荷物のお預かり、宿泊や食事場所、周辺の見学施設紹介や手配のお手伝い、時には急な豪雨の際の最寄り駅への送迎サービスも行うということで、グーグルレビューは★4.4と高評価を受けています。

なお歴史ドラマの魅力的題材は豊富にありますので、定期的に館全体で出し物を変え、何度来てもお楽しみいただけるよう工夫しています。

へ新型コロナ襲来を契機とした新会員制度導入へ



展覧会タイトル例 (チラシ)

騰により、全国の美術館・博物館の多くは未だ苦境に陥っています。そんな中、弊館では古代マヤ文字ドネーションという寄付制度と、それに連動した会員制度を導入しました。古代マヤ文字ドネーションでは寄付者の名前を私が古代マヤ文字で手描きし、解説書、額、防水性ミニシールセット、ゴム印を返礼品として差し上げています。



また寄付者の会であるヤシュ・ナーブ（古代マヤ語で青い海の意）村を立ち上げ、寄付者⇨村人の来館時にはさまざまなサービスで厚遇しています。さらに村まつりと称するオフ会を全国各地で開催して古代中南米の魅力を伝え、村人の交流を図る場も設けています。二〇二五年八月十六日時点での村の人口は三千百人。村人のみなさんには古代マヤ文字ドネーション協力のみならず、特定目的のための寄付やクラウドファンディング、ミュージアムグッズの購入、さらに弊館の魅力を身近な人に伝えるクチコミやネットコミ広報活動など、さまざまな形でご支援いただいています。へかなりアブナイBIIZEN中南米美術館へマーケティング手法の導入で入館者に高評価を頂

戴している弊館ですが、「魅力的な商品が必ずしも売れるわけではない」と同じく、集客面では苦戦を強いられています。その要因は立地と広報力です。館が立地する備前市日生町のエリア人口は六千人。公共交通はJR赤穂線のみで、ダイヤは一時間に一本という鄙びた町の美術館が集客に苦勞することは、容易に想像いただけると思います。広報に関しては、「素晴らしい美術館なのに、なぜこんなに来館者が少ないのですか。PR不足です」というお叱りを何度も受けています。ただ、多額の広告費を掛けられない中で無料パブリシティは目一杯活用していますし、各地で館のPRを兼ねた展覧会も積極的にを行っています。さらに人気のゆるキャラまで生み出して広報活動に努めています。が、いずれも際立った来館者増効果はありません。三年前にはインフルエンサーにより私の館内ガイドの様子が抱腹絶倒のユーチューブ動画で紹介され、十萬回以上のページビューと二千七百「いいね」や嬉しいコメントも多数いただいたのですが、これまでの来館効果は二百人程度です。その結果、立地のハンディが最大の集客苦戦要因だと改めて再確認しました。しかし立地が悪いかからといって座して死を待つわけにはいきません。そこで思いついたのが、外からお客さまを呼ぶのではなく、地元に来る観光客にターゲットを絞っての広報活動です。日生は全国有数の牡蠣の産地で、ご当地グルメのカキオコが大人気。牡蠣の季節である十月〜翌年三月は、



が最大の集客苦戦要因だと改めて再確認しました。しかし立地が悪いかからといって座して死を待つわけにはいきません。そこで思いついたのが、外からお客さまを呼ぶのではなく、地元に来る観光客にターゲットを絞っての広報活動です。日生は全

約五十万人の観光客が訪れます。その人たちに對する広報は地味な国道サインと観光協会のチラシ設置でしたが、入館時の聞き取りでは効果は極めて小さなものでした。そこでクラウドファンディングを行い、国道を通過して町なかに入る東西の玄関口と曲がり角に巨大ロードサインを設置。そして無い知恵を絞って考えたキャッチ「かなりアブナイBIIZEN中南米美術館」を入れました。本年一月に設置したサインは町民や観光客の間で話題となり、既に大勢のお客さまを弊館に導いてくれています。サインをご覧になった方々からはよく、「かなりアブナイって、どういう意味ですか」と聞かれます。サインにある土偶の表情のアブナイ雰囲気、本物の作品を使ってガイドするアブナさ、ドッキリの仕掛けもあるガイドネタのアブナさ、そして何よりも古代中南米の底無しの魅力沼にズブズブと沈んでしまうアブナさ。それを体験出来るのが、かなりアブナイBIIZEN中南米美術館です。一人でも多くの本記事読者のみなさんにも楽しい村の住人になっていただき、魅力沼に足を踏み入れていただければ幸いです。ご予約電話、お待ちしております。



町なかへの東の玄関口



館への曲がり角



町なかへの西の玄関口

ご予約フリーダイヤル
〇二二〇三六六二八七



ホームページ
QRコード

古文書をみんなで読む楽しみ

往還塾塾長

元京都芸術大学教授

五島 邦治



往還塾講座風景

大学を定年で辞める十年ほど前から、古文書塾を開きたいと考えていた。実は古文書を読みたいと思っている一般の人は意外と多いものである。呼びかけたら三十人ほどが集まった。年配の人だけでなく、学生もいる。当初は教室を借りていたのであるが、父親から譲り受けた下京の町屋を改修して（きょうび屋の上で、というわけにはいかないので、八畳の二部屋をつづけてフロアにし、机と椅子を置き、ホワイトボードを設置した）、専用の教室にしてからすでに丸六年になる（「往還塾」とよんでいる）。

上賀茂神社の文書調査に当初から関わって、現在も史料集の編纂委員を仰せつかっている縁

で、神社所蔵の「社中日記」を読みつづけている。この日記は「惣中」とよばれる賀茂の氏人の運営組織で書き留められた

公的な日記で、江戸前期から明治維新までつく膨大なものである。惣中は評議で決まったとり決めや幕府の法令を、十組に組織された氏人（いわゆる社家）、七町の百姓組織、寺庵組織へとそれぞれ伝達し、逆に氏人・百姓・寺庵からの訴訟・願いもこの惣中に対してなされ、その対処が協議される。そうしたわけで、上賀茂のあらゆる情報が集まるのが「惣中」で、ここで毎日仕事として書き留められたのがこの日記である。現代でいうと業務日誌というべきかもしれない。それを年次に従って順番に読んでいく。

古文書を読むというのは基本的に一人でする作業である。けれどもわからない文字や不明な内容に出会って、ほかの人に聞いてみたい、ということとはしばしばあるものである。本や辞書をひくほどでもなく、気軽にちょっとまわりに尋ねられるような人がいたら、と思うのである。あるいは、古文書の中の新しい発見や興味が起こった事件をみんなと共有したい、ということもある。一見、ひとりで読んでいる古文書解読の世界もどこかで他人と、つまりは社会とつながっている。そんな場所にしたいというのが、この古文書塾の趣旨である。

日記は今も昔もその日の天気からはじまる。簡単な表記だけでもその語句が今より豊富である。晴れについては「晴天」「天晴」、雨に関しては「雨降」「雨下」「雨天」、雨に関わらず「雨少大風」「風少有」「大風雨」といっ



上賀茂社家風景

た具合である。雪は「雪降」のほかに「雪飛」がある。適当にその日の気分で書いているのかと思ってい

場合は「天晴」で、ずっと晴れが続いている場合は「晴天」になっていることに気づいた。どうも区別があることがわかった。こんなことは何人かで読むことではじめて気づかされることである。「雨降」と「雨下」もどうも違いがあるようであるが、いまひとつわかっていない。

上賀茂の日記であるから、その舞台は上賀茂神社の周辺になる。現在も上賀茂神社の一の鳥居から東へ、明神川沿いに広がる一带にいわゆる上賀茂の社家町があつて、国の伝統的建造物群保存地区に指定されている。背の低い土塀に囲まれた社家と百姓家が混在している景観である。土塀の中には式台を構えた比較的小ぶりの平屋の社家建築がある。明神川の南側では川の水をとり入れた園池があることでも知られる。安永年間（一七七二―一七八一）の景観を描いたという「賀茂社家宅七町大旨之図」という地

図があつて、その地図と見比べてみても、明神川の流れや、川が曲がりくねって杜家の間に入る手前にある楠、明神川から南北の各町へ入る通り道や袋小路は、現在もほとんど変わらない。楠は地図でも現代でも杜家町のメルクマールになっている。

いま塾で読んでいる日記の時代は江戸時代前期の寛文年間（一六六一―一六七三）で、地図よりも百年ほど前なのであるが、それでも同じ町名や小社・堂が出てくるので、この地図を頼りに日記を読むことはそれほど無理なことでもない。

町というのは、百姓による自治的な町で江戸時代には岡本町・梅ヶ辻町・竹ヶ鼻町・南図子町・中大路町・池殿町・山本町の七町があつた。この町はあくまで百姓の組織で氏人（杜家）は関わりがない。氏人の家はこの町域にありながらも、十手という同族的な組織をもっていた。その町名は現在もひきつづいて残っている（「南図子町」だけは「南大路町」になった）。

各町には会所があつて、観音像や地藏像が祀られ、月ごとの観音講や八月の地藏盆が現在も行われている。そのうち中大路町の会所を「金堂寺」とよぶのであるが、寺号がついているの



金堂寺会所

は観音像が祀られているからだろうか、と漠然と考えていた。上賀茂の各町には「惣堂」とよばれる堂があつて、各町が堂守を置いたり、住持を頼んだりして管理していたことの名残なのであろう。ところが「社中日記」の寛文七年（一六六七）十一月十一日条をみると、「中大路町行事共」が惣中の会所へやつて来て、「金堂寺ノ鎮守」を建立することになったのだが、堂外の枝を売った代金では少し足りないのので、賀茂のお山に生えている木を「ツチイノ木」（土居）つまり杜殿の土台とする木）として拝領したい、といつて来ている。これに対して惣中からは、山に適当な木があるなら町のものが見立てて沙汰人まで申し出るように、とこれを許している。「中大路町行事共」は中大路町の責任者であつて、すでにこのころから中大路町の会所は「金堂寺」とよばれていたことがわかるのである。



金堂寺鎮守社

こうして、日記の中の上賀茂と現在の上賀茂とはつながってくる。わたしたちがたんに昔の古文書の世界と比べていたのは、なかなかどうして現代

の私たちの社会と連続していることを知るのである。塾の外に出て現地踏査するなら、それはいよいよ実感として私たちの体験の中に納まると思う。

日記の記事の大部分は、京都所司代・町奉行からの触れとその請書、氏人や百姓間の土地や遺産をめぐる訴訟、賀茂川の堤や御土居の修理に関するもので、そのあまりにも長々しい文面には少し辟易とするところもある。けれどもそうした少々しめつらしい記事の間に、ちょっとした生活の哀歓に触れる事件もある。

寛文七年四月二十日、関目隼人正季容という氏人が十歳と三歳の姉弟のふたりの子どもを賀茂川に突き落としたあと、みずからも身を投げて心中をはかった事件が記されている。けっきょく季容は生き残ったのだけれど、子どもたちは死んでしまったというのである。親類は、彼は勘当された身で、子どもの遺体も引きとらないという。季容は賀茂川西岸の墓地のなかにある窪御堂に住まわされて、「この躰にて御座候間、御慈悲に死骨御隠しなされ下さるべし（葬ってほしい）」といったという。氏人といっても生活は苦しかったのであろう。教室のあちこちから「かわいそうに」という嘆息の音が漏れたのであつた。とまあ、こんなふうに塾では日々古文書を読みつつづけている。

往還塾ホームページ
<https://sunmy-aso-0220.littlestar.jp/>



インスタグラム
QRコード

協会ニュース

▼第十二回角田文衛古代学奨励賞受賞

記念講演会の開催のお知らせ

同賞は、前年、前々年度2カ年の季刊『古代文化』への投稿論文（論攷、研究ノート）の中から秀作を選び授与される、若手古代史研究者のための研究奨励賞です。本年度は、第十二回目にあたります。受賞者は、越川真人氏（東京大学史料編纂所 古代史料学術専門職員）が選ばれました。受賞論文は、「平安時代中・後期の牛飼童と貴族社会」（『古代文化』第七六巻二号、二〇二四年九月刊行）。

十一月一日（土）授賞式および記念講演会を開催します。申込不要、入場無料、定員八十名。午後一時～三時四十五分（受付十二時半より）

会場 同志社女子大学今出川キャンパス
ジェームズ館 2階J207教室

（京都市上京区今出川通寺町西入ル玄
武町六〇二・一）地下鉄今出川駅下車

徒歩五分

授賞式 午後一時（臈谷壽理事長より賞状と

記念品の授与）

受賞者講演 一時十五分～二時

越川真人 「牛飼と牛車から読み解く平安京
の都市社会」

関連講演 野口孝子（古代学協会客員研究員）

「関寺の牛仏 牛に化身する仏・牛仏

への貴族たちの思い」

最後に登壇者によるデイスカッションを行います。司会は山田邦和（古代学協会副理事長、同志社女子大学特任教授）。

皆様のご参加をお待ちしています。お問合せは古代学協会事務局まで。

▼小野宮第址顕彰碑および解説板の

除幕式の開催

本号表紙にも紹介の通り、小野宮第址顕彰碑および解説板が設置され、七月十二日（土）その除幕式が開催されました。

本碑は、株式会社マリモ様が烏丸夷川西入ルにオープンされる、ホテル「Shaku」京都丸太町」の敷地に設置されています。監修は、（株）都市ガバナンス研究所代表 竹井隆人氏。古代学協会は京都市とともに協力をさせていただきました。永年、当協会でも小野宮第の顕彰碑の設置を願い、適地を探していましたがビルが建て混む地域であり、半ば諦めかけておりました。そのような中で、今回、竹井氏よりご相談を受けたことは大変嬉しいことでした。

小野宮第は『小右記』を著した藤原実資の邸第として知られ、一町（約一二〇メートル）四方に及ぶ規模で、実資の時代には、堂々たる「名第」として知られていたといえます。式は株式会社らくたび代表取締役 山村純也氏の司会のもと、（株）マリモ執行役員 端正敏氏のご挨拶、また京都市文化財保護課長 森尾勇三氏からお



左より臈谷理事長、竹井隆人氏、山田副理事長

言葉を賜り、当協会理事長 臈谷壽より藤原実資についての解説がありました。

続いて（株）都市ガバナンス研究所代表 竹井隆人氏と臈谷理事長によって除幕がおこなわれました。次に、当協会副理事長 山田邦和から、小野宮第の説明および顕彰碑設置の重要性と難しさについて話を致しました。また、サブライズとして、ロバート秋山氏からいただいた祝辞を読み上げたことで、会場は大いに盛り上がりました。

今回、監修・設置に尽力された竹井様はじめ、ご協力を賜った（株）マリモ様には敬意と感謝の意を表したいと存じます。

近くにお越しの際は、是非お立ち寄りいただき、往時に思いを馳せていただければ幸いです。

▼第五回古典の日文化基金賞

二〇二四年刊行の古代学協会監修『史実でたどる紫式部——「源氏物語」は、こうして生まれた。』の著者のお一人、山本淳子氏（京都先端科学大学教授）と 中田 昭氏（写真家）が、第五回古典の日文化基金賞を受賞されました。九月三日（水）京都市左京区 京都コンサートホール アンサンブルホール ムラタにおいて授賞式が開催されました。

文化基金賞は二〇一二年、十一月一日が「古典の日」に制定されたのを記念して古典文化の研究、普及啓発活動に貢献した個人、法人、団体を顕彰することを目的としています。古典の日文化基金賞顕彰委員会は、二〇二〇年の設立以来その運営にあたっています。



山本氏は文学・思想分野において、中田氏は美術・生活文化分野、また伝統芸能・音楽分野において木ノ下裕一氏（木ノ下歌舞伎主宰）が選ばれました。

▼二〇二五年度後期古代学講座の申込の開始
後期講座のラインナップは次の通り。内容、申込状況は、協会ホームページ、あるいはお電話でご確認ください。

縄文時代の考古学 矢野健一（立命館大学特別任用教授）
『源氏物語絵巻』を読む——概観及び「蓬生」の精読——

中島和歌子（京都女子大学文学部教授）

座学と現地散策で学ぶ考古学の成果 梶川敏夫

（元京都市考古資料館館長）

桓武朝の歴史考古学 山中章（三重大学名誉教授）

天皇陵研究の最前線 山田邦和（同志社女子大学特任教授、古代学協会副理事長）

探求!!古墳時代の群集墳をめぐる謎 森岡秀人（古代学協会客員研究員）

大正・昭和初期の古都京都——近代から現代へ

高木博志（京都大学人文科学研究所名誉教授）

北野天神信仰の文化史 西山 剛（京都文化博物館主任学芸員、北野文化研究所特別研究員）

古代の日朝関係史 田中俊明（滋賀県立大学名誉教授）

『小石記』講読——平安貴族の日常に触れてみよう——

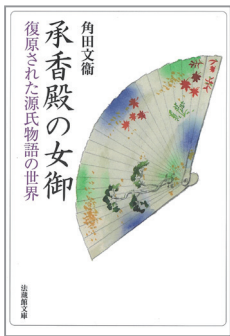
野口孝子（古代学協会客員研究員）

平安王朝の歴史と文化 隴谷 寿（同志社女子大学名誉教授、古代学協会理事）

出版だより

▼法蔵館文庫 角田文衛著『承香殿の女御復原された源氏物語の世界』

本書は、一九六三年に中公新書として刊行され、その後二〇一八年に著作集『角田文衛の古代学Ⅰ 後宮と女性』に収録されている。



その折、責任編集を担われた吉川真司先

生（京大名誉教授）が五百近い註に引用されている史料を逐一原典と照らし合わせ、誤りをただされた。今回は、この「完全版」が法蔵館文庫として一般読者向けに出版されたのは嬉しいことである。一条朝の後宮と言えば、藤原定子、藤原彰子にばかりスポットライトが当たっているが、本書ではその栄華の陰にあり「いと時めき給わぬ女御」藤原元子の喜びや悲しみに彩られた一生を余すところなく描いている。父である、左大臣藤原顕光に関する描写も心の起伏に分け入って、その生き様を活写している。

巻末の上原作和先生（元明星大学教授）による「解説 角田古代学の真骨頂」も本書を深く味わう上で読者の理解を助ける力となっている。生前の角田先生との出会いのエピソードも心温まる思いがする。

法蔵館文庫では、二〇二〇年、角田先生の『平安人物史』（上）（下）も刊行されている。今回も「復原された源氏物語の世界」を生き活きと描ききった名著の、装い新たな登場を心から喜びたい。

法蔵館、二〇二五年八月刊、二二二頁、一〇〇円＋税、ISBN 978-4-8318-2706-7

発行者 公益財団法人古代学協会
京都市中京区三条通高倉西入ル
菱屋町四八
電話〇七五・二五二・三〇〇〇
発行日 令和七年九月二十日
編集 公益財団法人古代学協会 企画部